非道と淫虐の上意

陰謀の贄にされた父と
淫欲の贄にされた母子

綾乃編　全裸縄付道中

濠門長恭

目次

一、母子連座……三
二、裸縛道中……二五
三、道中破瓜
四、番屋預置
五、折檻興行
六、悦虐道中
七、逆転仇討
八、着衣帰参
九、悦辱花道
後書

一、母子連座

御蔵番頭（ばんがしら）の小早川忠茂が行方知れずとなった二日後には、八百両を超す公金が消え失せていることが発覚した。即刻、小早川家は閉門に処され、妻の民江以下、嗣子佐太郎、長女綾乃、次女琴乃も蟄居を命じられた。

その日のうちに通い中間は消え失せ、住み込みの下女二人も巻き添えを恐れて口入屋へ逃げ帰り、屋敷には一家四人のほかは先代から仕えている年老いた用人ひとりだけとなった。長屋住まいの二人の郎党は寄りつきもしない。

翌日には、大目付が配下の手勢を引き連れて屋敷に乗り込み、秋霜烈日の断が下された。

上意

御蔵番頭小早川忠茂儀　八百余両の公金を拐帯せしばかりか長年にわたって二千四百九十三両を着服せし不届きの段によって士籍を削り而して死罪を申し付くる物也

直ちに討手を掛けて櫓櫂の及ぶ限り追い詰め屹度討ち果たすべし家族は之に連座して名を非人別改帳に移し以下の如く処する物也

一、民江儀
　吟味の為入牢を申し付くる

一、嫡子佐太郎儀
　精徳寺へ永代預かりとする

一、長女綾乃儀
　処断は猶予し小早川追捕一行への同行を申し付くる

一、次女琴乃儀
　奴（やっこ）として舞華楼亭主に下げ渡すものとする

因って件の如し

死一等を免除されたのだから一見寛大な処置のようであるが、武家の妻子として死罪に処されるのではなく、非人に墜とされるのでは、死罪よりもなお苛烈だった。

「それがしからも申し渡しておく」

平伏している四人の頭越しに、大目付が厳しい声を投げつけた。

「もし一人たりとて命に服さず逃亡を試みれば、一家そろって市中引き回しのうえ磔に掛けるから、左様心得おけ」

自害は許されぬにしても、せめて屋敷内でひっそりと首を落とされるのと、罪人として庶民の目に晒されたあげくに刑場で磔にされて槍で突き殺され、そのまま骸を野晒にされるのとでは、同じ死刑でも雲泥の差がある。

それにしても……可哀想なのは妹だ。いまだ血の道も通じておらぬ■三歳（※）の子供が遊郭で働かされる。それがどれほど残酷な

ことか、綾乃には想像もつかなかった。ただ『悲惨』の二文字しか頭に浮かばない。

それに引き換え――我が身への処置は、どう考えればよいのだろうか。追捕一行への同行。まさか父の逃げた先を知っているとでも、疑われているのだろうか。もし知っていたとしても、義に反してでも孝に従い、父を追い詰めるような真似はしない。いっそ、母とともに牢で責め問いに掛けられたほうがましだ。

しかし、ほんとうに父は、このような苛烈な処断を受けるほどの罪を犯したのだろうか。それが、綾乃には信じられなかった。

二百五十石の家禄に百石の職禄を加えても、用人以下六人に給金を払うだけでなく食事も与え夏冬のお仕着せも調えるとなると、一家の生計（たつき）に残る金はわずかなものだった。八百両どころか、切餅の一つか二つもあれば、ずいぶんと楽に暮らせていた。父は二千五百

両も着服して、いったいなにに使ったのだろう。ほんの一部でも家族のために使おうとは思わなかったのだろうか。

「やめて……縛らないで」

「御上のなさることです。おとなしくしていなさい」

妹と母の声で、綾乃は呆然自失から醒めた。母と佐太郎はすでに縄を掛けられ、今は下役人の手で妹まで縛られようとしていた。

琴乃の手首は前で縛られ、腕を斜め上へ突き出す形で縄尻が首に巻かれた。腰にも別の縄が巻かれた。

三人の縛られ方は、それぞれに異なっていた。母は後ろ手に縛られ手首を吊り上げられて、胸を囲むように大きな菱形が身体の前で作られている。弟は背中で腕を水平に重ねて縛られている。幼老男女の別、さらには身分ごとに捕縛の形が定められていることなど、綾乃は知らない。

「引っ立てい」

大目付の下知で、三人は下役人に縄尻を取られて座敷の外へ追い

立てられた。あとには綾乃と大目付とその配下の一人だけが残った。
綾乃は座したままうなだれて、我が身への処置を待っている。尋ねたいことは幾らでもある。父は公金を着服するような人物ではないと、声を大にして訴えたい。けれども、言葉のひと欠片すら聞き届けてもらえないと、わかりきっている。人別は削られても、綾乃の心根は武家のままだった。悪足掻きをして醜態を重ねるなど、できるはずもない。
ドカドカと廊下を踏み鳴らして、四人の男たちが座敷に姿を見せた。長身痩躯の三十男と、それよりは幾つか若い大兵肥満の男。その後ろには、がっしりした身体つきの青年。しんがりは、最年長に見える中肉中背。長身痩躯は月代を剃っていないし大兵肥満にいたっては総髪。きちんとした役職に就いていないどころか、家臣ですらないだろう。
「小早川忠茂が娘、綾乃をお預け致す。存分に使われい」
大目付は青年に向かって声を掛けた。つまり、最年長の男も青年

以下の身分だということだ。
「たしかに、お預かりします」
青年は礼儀正しく答えてから、綾乃に目を向けた。
「拙者は平岩隼人。御徒組小頭です。このたびの討手の差配をおおせつかりました。こちらは、小島平介、藤川勝正、本多尚次です」
「平岩殿。人にも非ぬ大罪人を相手に、名乗りを上げることもなかろう」
小島と紹介された長身痩躯が、小馬鹿にしたように口を挟んだ。
「それよりも、さっさと旅支度をさせようではないか」
「あの……なにをどのようにすればよろしいのでしょうか」
初めて、綾乃が言葉を発した。泊りがけの参詣にすら出たことのない■六歳の娘には、旅支度の仕方などわかるはずもなかった。
「まずは素っ裸になってもらおう」
「え……？」
聞き間違えたのかと思った。旅装束に改めるにしても、まさか殿

方の前で着替えるわけにもいかない。
「ええい、まだるっこしい。藤川、そやつを立たせろ」
大兵肥満が両腋に手を差し込んで、綾乃を牛蒡抜きに立ち上がらせた。
「無体なことをなさらずとも……」
立てと言われれば立ちます――と言いかけて、綾乃はハッと息を呑んだ。
「むん！」
小島が手に提げていた大刀を正面で抜き打った。
身構える暇も身を躱す暇もなかった。綾乃の鼻先すれすれに走った切っ先は、帯もろとも肌襦袢の扱きまで切り裂いて、しかし肌は傷つけなかった。
懐剣術の切紙を許されている綾乃には、男の剣術の凄まじさがハッキリとわかった。胆を飛ばしたりはしなかったが、この男に逆らうことの愚を悟った。

まだ綾乃を羽交い絞めにしていた大兵肥満の藤川が、身頃を左右に引き裂くようにして綾乃の肌を露わにした。

「なにをなさいます！」

綾乃は逃れようとしてもがいたが、万力にでも挟まれたように身動きならなかった。

「何度も言わせるな。おまえの旅支度をしてやっているのだ」

袖を抜くのも面倒とばかりに、小島が今度は小刀で着物も肌襦袢も切り破った。

立たせたばかりの綾乃を、また力ずくに座らせてから、小島が藤川と入れ替わった。膝頭で背中を押さえてうつむかせ、綾乃の両手を背中に高くねじ上げた。

「このような狼藉……如何に罪人の娘とはいえ、不当に存じます。大目付殿、平岩殿、なぜ見過ごされるのですか」

綾乃が指摘したとおり。目の前で若い娘が肌も露わにされているというのに、大目付は黙って（いささか好色の眼差しで）眺めてい

るだけ。小島たちを差配しているはずの平岩は苦々しげに――目をそらせている。

縄が綾乃の手首をひとつに縛り合わせて、さらに胸をきつく巻いた。胸縄は上下二段に巻かれて、まだ熟れきっていない乳房をいびつに縊った。母の民江や妹とはまったく違う縛られ様だった。

縄も下役人が使っていたような年季のはいった物ではなく、真新しい麻縄だった。そのぶん肌当たりは痛いのだが、生まれて初めて緊縛された綾乃には、そんな違いがわかるはずもなかった。

二本目の縄が足されて首を巻かれ、乳房の谷間で上下の胸縄を絞り合わされてから左右に分けられ、腋の下でも胸縄を引き絞られた。

「くうう……」

声も出せないほど驚き怯えている綾乃だが、胸を圧迫されて吐き出された息が、自然と呻き声になった。二本目の縄は背中を斜めに降りて腰骨の上で結び合わされてから腰を巻いた。二つに分けられた縄尻の片方だけが、長く垂れ下がった。

その縄尻を吊り上げられて、綾乃はふたたび立たされた。
「これも道中には邪魔だな」
小島は綾乃の腰に手をまわすと、抗う暇も与えずに蹴出しを毟り取った。
「いやああっ……！」
悲鳴をあげてしゃがみ込もうとする綾乃。それを羽交い絞めにする藤川。
人前で平然と赤ん坊に乳をふくませる母親を見てもわかるように、この当時の女は乳房だからといって格段に（素肌を晒す以上には）羞恥を覚えはしない。しかし蹴出しを剥ぎ取られては、丈の短い湯文字では脛どころか膝までが見えてしまう。
その最後の砦ともいうべき湯文字にまで、小島が手を伸ばした。
「それくらいでやめておけ」
初めて、大目付が狼藉を制した。
「御城下である。あまりに見苦しき様は遠慮致せ」

「見苦しいどころか、見目麗しいと思うのだがな」
うそぶいて。しかし小島は素直に手を引っ込めた。
「では、旅支度も調ったところで、早々に出立致そうか、平岩殿」
アッ……と、綾乃は思った。それでも、まだ半信半疑だった。
「こ、このような姿で……わたくしを連れ出すつもりなのですか」
「それどころか」
小島が綾乃に嗤いかけた。端正な顔立ちだけに、酷薄さが剥き出しになっている。
「噂を聞きつけて小早川が姿を現わすまで、ひと月ふた月、いや何年でも街道を引き回すつもりだ」
我が身は囮なのだ。綾乃は、卒然と理解した。娘がこのような姿を晒していれば、飛脚よりも速く津々浦々を駆け巡る噂を聞きつけて、父は必ず救けに戻って来るだろう。
江戸の仇を長崎で討てれば上首尾。東西南北いずこへ奔ったやも知れぬ仇を追い求めて、ついには見知らぬ青山に骨を埋めるのが敵

討の末路だった。公金持ち逃げの追討も同じこと。しかし、妻や娘に生き恥を掻かせて引き回せば、まるで話が違ってくる。

卑劣な――羞恥を忘れるほどに、綾乃は逆上した。

「大目付殿」

綾乃はキッと顔を上げて、大目付を睨みつけた。

「このような侍の道、いえ人の道にもとるような事を、御上は許されるのですか」

「三千三百両を埋めるには、領民の膏血を絞らねばならぬ。そのような没義道を御家に強いる男こそ、人の道にはずれておるわ」

「大目付殿。大罪人に理を諭しても無駄というものです。そら、サッサと歩け」

綾乃に向き直ると、小島はゆっくりと乳房に手を伸ばした。

「……！」

後退さって逃れた綾乃は、おのれから廊下へ出ていた。さらに追いすがる小島に背を向けて――否応もなく歩み始める綾乃。

後ろに長く引いた縄尻を小島が拾い上げて。
「キリキリ歩け」
戯れ半分に、ピシリと縄で尻を打った。
「く……」
捕囚として歩かされる形になってしまって、綾乃は立ち止まるきっかけを失った。そのまま廊下を進んで、玄関口に達したところで、今度は腰縄を後ろへ引かれてこれも否応なく立ち止まらされた。
式台に腰掛けさせられて。白足袋を脱がされても、もう綾乃は逆らわなかった。
素足に草鞋を履かされた。極端に短く、土踏まずから後ろは足の裏が剥き出しになっている。足半（あしなか）という履物で、物売りなどが履いているのを、綾乃も見たことがある。
「囚人は素足と決まっておるが、生爪を剥がされたりしては面倒なのでな」

しかし綾乃としては、極貧の庶民と同じ物を履かされるよりは、いっそ素足のほうがまだしもだった。が、今はそんなことにかまっていられない。羞恥に苛まれながら廊下を歩くうちに、綾乃は決心を固めていた。

「どうあっても、わたくしをこの姿で外へ引き出すおつもりなのですね」

綾乃はあえて差配の平岩に向けて、精いっぱいのきつい声で意向をたしかめた。

「ようやく得心したかな」

揶揄を含んだ小島の声には答えず。綾乃は平岩を見据えた。

「それでしたら、この場で舌を噛み切って死にます！」

言葉だけではない。小さく開けた口から、思いきり舌を突き出した。舌を噛むときにはできるだけ奥にしなければ死ねないことくらい、武家の娘として心得ている。たとえ骸となってこのまま外に放

り出されようと、生き恥を晒すよりはましだと、ハッキリ決心していた。
「そうなると、舞華楼の亭主とひと悶着だな」
小島が他人事のように言った。
（……？）
今にも舌を噛む構えは崩さず、綾乃は訝しそうに小島を見た。
「おまえほど見栄えはせぬが、妹を身代わりに立てるしかあるまい」
生涯一度の決心が、綾乃の心の中で音を立てて崩れた。
自害すれば、妹が素裸に縄打たれて大道を引き回される。■三の身空で純潔を散らされて、さらには夜毎に男に嬲られる境遇と、どちらがましか――という問題ではない。
「卑怯な……」
綾乃はつぶやいてうなだれた。
「その言葉は、おまえの父親にぶつけてやれ」

さあ歩けと、小島が縄尻で綾乃の尻を打った。
綾乃は唇を噛んで。羞恥と憤りとに身を震わせながら、玄関口を出た。
竹矢来でふさがれた表門の脇口が藤川の手で開け放たれて。綾乃が立ちすくんだ。
二十人ばかりの人だかりができていた。人通りの少ない武家町の昼日中。野次馬の大半は、どこかの屋敷の中間か下女だった。
おおおおっ……と。綾乃の緊縛された裸身にどよめきが湧き起こった。
もしも、ほんとうにこの姿で道中させられるのなら。これしきのことで挫けてはいられないと、綾乃は死ぬ思いでおのれを励まして門をくぐった。
「母上……」
母と弟妹とが、座敷から引き出された姿そのままで、目の前にいた。野次馬たちは、この三人を目当てに集まっていたらしい。

「姉様……おかわいそう」
姉の無残な姿を見て、琴乃が泣きじゃくり始めた。
「なにゆえ、このようなむごい仕打ちをなさるのです」
遅れて姿を現わした大目付に、母の民江が腰縄の許す限りに詰め寄って、下役人に引き戻された。
「それはな、こういうわけだ」
外で待っていた小者から小島が高札を受け取って、地面に突き立てた。

此娘儀　父親公金拐帯に付見せしめに引き回す物也
小早川忠茂　身の丈五尺六寸　痩身　四十歳　稍若く見える
右眼横に小粒黒子右手甲に火傷痕有り
在所を報せし者に金拾両を与える物也

「姉で父をおびき出そうとは――卑劣な！」
佐太郎が激高して、しかし腰縄を強く引かれて高札から遠ざけら

れた。
おい――といった風情で、小島が平岩の背中に触れた。
不承不承を顔に表わして、平岩が大目付に正対した。
「一同打ち揃いましたからには、早速にそれぞれの場へ曳くべきと存じます」
「うむ」
小島が高札を綾乃の背中に立てた。首縄を通してから、手首と背中の間に根元をねじ込み、縄を足して腹をくびった。
「く……」
胸を圧迫され、今また腹部まで締め付けられて、綾乃は息が詰まった。が、息苦しさなど、今にも気を失いそうなほどの恥辱の前には取るに足りないことだった。
「先を歩かせてやろう」
ピシリと縄で尻を打たれて、綾乃は歩き始めるしかなかった。ここで悶着を起こしても生き恥の上塗りになるだけでなく、母や弟妹

も苦しめることになる。

心は恥辱にまみれ目は屈辱に霞んでいたので。後ろについてくるのは母と妹だけで、弟はまるきり逆の方角へ曳かれて行ったとは、綾乃は気づかなかった。

行く先々で屋敷の表門は閉ざされていた。そのくせ、通用口からは使用人たちの顔がいくつも覗いている。

武家町からはずれるあたりで、母が別の道へ引き離されたのにも、綾乃は気づかなかった。そちらは牢屋敷に通じる道だった。

城下から遠ざかって町人町に入ると、様相が一変した。姉妹が引き回されている大道は、両側に人垣ができていた。二階家の窓も見物人で鈴なり。

大目付は佐太郎に同道していたし、民江が牢屋敷へ向かってからは、一行の中で役人然としているのは、大目付配下の一人と、琴乃の縄尻を握っている下役人だけ。一行が通り過ぎると人垣が崩れて、そのうちの幾人かずつは後を追ってきた。

そして。街はずれで琴乃が遊廓街の方角へ曳かれて別れると――野次馬のほとんどは、綾乃の裸身に引き寄せられた。

間近に寄って裸身に見入っても、追い払おうとするのは若い侍が一人だけ。それも、長身痩躯の浪人が野次馬の肩を持つようなことを言って抑えてしまう。

綾乃は、顔を上げて歩いている。うなだれれば、高札に巻かれた縄が首を絞めつけてますます息苦しくなる――からだけではない。恥辱に屈してしまえば、妹よりもひどく泣いてしまうとわかっていた。涙をこぼさないためにも、気を強く持って、シャンと歩くしかないのだった。

そんな綾乃でも――まだ弥生も半ば（新暦に換算して五月初旬）だというのに全身に噴き出た汗と、風呂にうだったような肌の赤みとは、我が身ではどうにもできないのだった。

街はずれからさらに一里も歩いた頃には、さすがに後を追う野次馬は消え失せて。それでも城下に続く街道のこととて人通りは多く、

同じ方角へ向かう者は足を緩めて並び掛け、城下に向かう者はしばし立ち止まって一行（というよりは綾乃の緊縛裸身）を名残惜し気に見送るのだった。

※数え歳

生まれたときを一歳として、年が改まるごとに増やしていきます。大晦日に生まれた子は、生後二日目で二歳になるのです。ちなみに、綾乃は長月の生まれ、琴乃は神無月の生まれである。

二、裸縛道中

街を出る前に母や妹が別の方角へ連れ去られたことすら気づかなかった綾乃は、なにも考えられず、ただ恥辱と屈辱と悲憤とで胸をいっぱいにして、悪夢の中を歩んでいた。

ようやくに、縄で締め付けられた手首の痛みや胸の苦しさ、半分素足で歩かされている踵の痛みなどを覚えた――心の働きを取り戻したのは、それなりの佇まいをした農家の庭先で足を止めてからだった。

生垣の向こうから、三十人ばかりの野次馬がこちらを見ている。野良仕事を放り出して何事ならんと駆けつけた男女に交じって子供の姿も見える。おとなも、それを咎めない。いかがわしいものを見せまいとするよりも、悪いことをすればああなるのだよという見せしめの意味もあろうか。

陽はすでに沖天に達している。食事を作らせるのか弁当を使うのか、一行はともかくもここで昼休みを取るつもりらしい。

農家の主を脅しつけた小島が、一行を中へ引き入れた。綾乃も高札を抜かれて、土間の奥にしつらえられた厩の柵に縄尻をつながれた。

ほんの二里か三里を歩いただけなのに、足が疲れ切っていた。心労もあるが、両手で身体の釣り合いを取れぬので、ひどく歩きにくかったせいもあった。

「小島殿。休む間だけでも縄をほどいてやっては如何でしょうか」

平岩の遠慮がちな物言いは、歳の差を立てているだけではない。名分上は差配人であっても、実際に一行を取り仕切っているのは小島だった。

「俺の七合流捕縄術は目録の腕前だ。まる一日縛していても、血流を滞らせることなどない」

「いや、しかし……」

平岩はそれ以上の指図めいたことは口にしなかった。その代わりに、彼なりに思い当たることを尋ねた。
「貴殿は、ことのほか、この娘を無慈悲に扱っておられるように思える。なんぞ、恨みでもおありなのですか」
「まさか」
小島が鼻で嗤った。
「縄の味はおろか、男の肌も知らぬ生娘を、御殿様の許しを得て好き勝手に甚振れるのだ。骨の髄まで味わい尽くさねば男ではないわ」
つまりは、おのれの嗜虐趣味の生贄に供すると言い放ったのだが。女を苦しめてそれを愉しむ男がいるなどとは、想像の埒外にある平岩だった。
いっぽう、綾乃は。生娘の本能で、我が身はこれからもこの男に嬲られるのだと悟りはしたものの――遅かれ早かれ操を穢されるだろうとまでは戦慄したものの。複数の男に犯されるよりも残虐な仕打ちが幾らでもあることまでは思い至らなかった。

それよりも。せめて歩いていない間だけでも足を労わっていたかった。湯文字の裾を乱さぬよう気をつかいながら、厩の柵に背をすりつけるようにして腰を落として地べたに座り込んだ。

農家の主みずからが差し出した馳走を（平岩を除く三人は）無遠慮につつきながら、さすがにこれは持参した握り飯で、四人と二人の小者が中食（なかじき）を始めた。

ふと平岩が立ち上がって。握り飯と竹筒を持って、綾乃に近づいた。

「これを食え」

中腰になって、握り飯を差し出す。

綾乃は平岩を睨みつけて、唇を固く引き結んだ。我が身にこのような生き恥を強いた男の手から、なんで施しなど受けられようものか。四人の中ではまだしも情けを掛けてくれているらしい男に甘えようなどとは、ちらとも思い浮かばぬ綾乃だった。

「では、水だけでも飲んでおけ」
竹筒の木栓を抜いて、飲み口を綾乃の唇にあてがった。綾乃は、プイと顔をそむけた。
フウとため息をついて、平岩が腰を上げた。
「飲みたくなったら言え。いつでも飲ませてやる」
「平岩殿。生餌を甘やかしては、つけ上がるばかりだぞ」
「生餌か。なるほど」
藤川が合いの手を入れる。この二人は、昔からの悪遊び仲間だった。
中食を終えて、小島が綾乃を厩から三和土（たたき）に引き出した。
「屋敷では大目付殿に邪魔されたが。ここからは、もちっと見栄えの良い旅姿にしてやろう」
ハッと、綾乃も思い出していた。
「厭です！　それだけはお赦しください」

はっきりと哀願口調で訴えて。しかし、逃げ場はどこにもない。藤川が綾乃を羽交い絞めにして、小島がおもむろに湯文字を毟り取った。

「いやああっ……！」

屋敷を出てからは気丈に封印してきた悲鳴が、綾乃の喉から迸った。

「お願いです。なにをどうされても、文句は言いません。でも、腰巻だけは返してください」

小島の眼が、スッと細まった。

「なにをどうされても、とな？　そういう曖昧な物言いでは、さっぱりわからんな」

「……」

女の口から言えることではなかった。好き勝手に甚振るという小島の言葉を耳にしたとき、綾乃は最悪の事態をハッキリと頭に描いていた。まっとうな娘なら自害するしかない事態だ。しかし、我が

死ねば三つも年下の妹が身代わりにされる。小島と藤川、もしかすると本多や平岩にまで夜毎に肌を嬲られながら、昼は裸身を縛されて引き回される。そこまでは我慢する。無駄に逆らったりもしない。だから腰の周りだけは隠してほしい――などと、言えるはずもなかった。

「だいたいな。どうして一枚の布きれにこだわるのか、それが俺にはわからん。納得できるように言えば、返してやらんでもないぞ」

その言葉にいっそうの悪巧みがあるとは思いもせず。綾乃は、女の身としての羞ずかしさを男にわかってもらおうとして、言葉を探した。

「あの……腰巻がないと、羞ずかしい所を見られてしまいます」

「羞ずかしい所とは？」

「あの……あの……」

綾乃とて、ホトとかボボという言葉は聞いたことがあるが、まさか口に出しては言えない。漠然とマタと言うさえ気が遠くなりそう

だった。
「あの……下の毛とか……」
「なんだ。股座（またぐら）に生えている毛が見えるのが羞ずかしいのか？」
拍子抜けした態で小島が、重ねて訪ねた。
「はい……」
思いが通じたと安堵した綾乃だったが。
「それなら、股座の毛を剃り落としてやろう」
ヒイッと、息を呑む綾乃。
「違います！　そういうことではありません」
しかし、小島は耳を貸さない。最初からそのつもりで、綾乃を引っ掛けたのだ。
「藤川。こいつを仰向けに押さえつけておけ」
「心得た」
阿吽の呼吸で、大兵肥満の藤川が綾乃を三和土に押し倒した。

「亭主。井にでも水をもらおうか」
農家の主にまで悪戯の片棒を担がせる。
亭主は大慌てで台所の水瓶から水を汲んできて、井を上がり框に置くなり、奥の部屋へ逃げ込んだ。
「厭です。やめてくだ……いやあああっ！」
肩を押さえつけられていても、自由な脚をばたつかせていた綾乃だったが。双つの乳房を熊手のようなごつい手で握りつぶされて、いっそうの悲鳴をあげた。生まれてこの方、これほど激甚な苦痛を味わったことがなかった。
「おとなしくしておれ。これでも手加減してやっとるのだぞ」
「……わかりました。もう手向かい致しません」
乳房への圧迫が緩んで。綾乃は全身を強張らせたまま目を固くつむった。
小島が小柄（こづか）を抜いたのを、綾乃は見ていない。

ぴちゃ……下腹部に冷たい感触があって、綾乃はピクッと身を震わせた。が、撫でまわす掌から逃れようとはせず、ヒッと息を詰めたのみで、悲鳴は呑み込んだ。

下腹部からおぞましい掌の感触が消えてホッとしたのは一瞬。冷たく硬い物が肌に触れた。

ザリッ……刃物が滑ると同時に、音ではなく肌がかすかに引き攣れた。

ザリッ、ザリ……二年半前に芽吹いてから次第に色濃くなってきた叢が、たちまちに失われていく感触。閉じた目から、涙があふれた。

「ひゃあっ……！」

内腿に手を差し込まれ、ガッと脚を左右に割り広げられて、綾乃は悲鳴を噴いた。が、いまだ握られている乳房をギュッと圧迫されて、抵抗を諦めた。

冷たい感触が鼠蹊部を撫で、さらには割れ目を閉ざす肉唇まであ

ちこちに押されたり引っ張られて、そこまで剃られる。
「まるで童女のごとく可愛らしゅうなったと言いたいが……」
「あひっ……」
股間に小さな火花が走ったように、綾乃は思った。それは――触れてはならぬ場所の上端にチョコンと顔を出している肉芽に落とし紙の縁が擦れたときの感覚に似ていた。
「蛤から足が出ておるな」
脚をピタリと閉じ合わせていればほとんど見えないが、今のように開脚すると小淫唇が露出する。小島は、それをからかったのだった。
「これで、望みどおりに毛は見えなくなった。では、先を急ごう」
藤川に乳房を引っ張られ背中を押されて、綾乃は身を起こさざるを得なかった。さらには、無理強いに立ち上がらされた。
「ひどい……ひど過ぎます」
この男に女の涙は通用しないと、綾乃は身をもって知った。しか

し、いろいろな意味で女を哭かせるのを好むとまでは、生娘に見抜けるはずもない。

「この身を穢されることは、とっくに覚悟しています」

ついに綾乃は、口にすべきでない言葉を言ってしまった。

「なにをされても、手向かい致しません。ですから、どうか……腰巻とは言いません。せめて手拭いのひとつも、腰に巻いてください」

綾乃は小島の前に膝を屈して頭を下げた。百姓町人ならいざ知らず。将来の夫になる殿方以外の男に隠し所を見られようものなら、その場で喉を突くのが武家娘と――すくなくとも、それが建前だった。磔に掛けられる女囚ですら、槍を突き通しやすいように乳房を露出させられても、裾はキッチリ縄で縛られているではないか。

「わかった、わかった」

小島が閉口した顔を作った。その下の嗜虐と淫欲を、綾乃は見抜けない。

「手拭いでは、いつはだけるか知れたものではない。望むなら褌を

締めさせてやってもよいぞ」
ホウッと、安堵のあまり頭が痺れた。褌一本の裸体を晒すことを羞ずかしく思う常の心は、すでにない。それに――女でも褌を締める例はある。女相撲はともかく、家の普請に来た者の中に褌と半纏姿の女がいたことを、幼かった綾乃は覚えている。男物より小さな褌一本で潜り漁をする女を絵草紙で見ている。
褌なら、どれだけ激しく動いても、局部が露出する懸念がない。
「ありがとうございます。是非にお願いします」
綾乃は本心から頭を下げた。小島と藤川が薄嗤いを浮かべたのにも、平岩がきな臭い顔になったのも、綾乃は気づかなかった。
はたして。小島は綾乃の腰縄をほどいて、それまでより少し下、腰骨のあたりに巻き直した。
「……？」
なにをされるのかと、綾乃は身を固くした。しかし、なにをされるかわからないうちは、抗うわけにもいかなかった。

縄は前で結び合わされた。縄尻を下へ引っ張っても、結び目は動かない。それを確かめてから、結び目のすぐ下に大きな輪を作って、縄尻を二度三度とくぐらせて引き絞る。そうやって作った縦長の太い結び瘤を綾乃の股間にあてがって、小島が無慈悲に言う。

「脚を開け」

その言葉を聞いて、綾乃は嗜虐者の意図を理解した。

「厭です。まさか、これを褌などとおっしゃるつもりではないでしょうね」

「褌だとも。縄で編んだ褌だ。縄褌を締めると、たいがいの女は疲れ果てるまで歩き続けるようになる」

フフンと、横で藤川が小さく嗤った。小島が言うたいがいの女とは、海千山千の夜鷹のことだった。何百何千本もの魔羅で鍛えられてきた道具と未通娘のそれとは、まったくの別物だ。男を知らぬ柔壺にゴツゴツした結び瘤など埋め込めばどうなるか、この男には容易に想像できた。が、そんなことはおくびにも出さない。どころか、

綾乃を背後から抱きすくめて、両の乳房をわしづかみにした。
「よほど、乳を握りつぶされるのが好きなようだな」
「く……」
悔しさを呻きに乗せて、綾乃はおずおずと脚を開いた。
すかさず麻縄が股間をくぐり、太い結び瘤が女淫を圧迫する。小島が片手で器用に肉の土手を左右に押し広げて、結び瘤を埋め込んだ。
「ひいいっ……痛い！」
痛いというよりは、鋭いが重たい圧迫だった。そのような感覚を表わす言葉を、綾乃は知らなかった。
「くううう……」
尻の谷間を割って縄尻が引き上げられ、後ろで腰縄に巻き留められた。
悲鳴をあげてのたうちまわるほどの痛みではない。しかし、じわじわと股の奥にまで食い込んでくる鋭い圧迫の背後に、痺れるよう

な未知の感覚が潜んでいた。
背後から抱きすくめていた藤川が手をはなすと、綾乃は三和土に崩折れた。
「望んだとおりに褌を締めてやったぞ。文句はなかろう」
文句は――言うだけ無駄と、綾乃はとっくに悟っている。
「サッサと立ってキリキリ歩け」
およそ出来そうもない無理難題だった。
「立てというのが聞こえんのか」
うずくまっている綾乃の胸に手をまわすと、藤川が乳首をつまんで斜め前へ引っ張り上げた。
「きひいいっ……」
鋭い痛みに引きずられて、綾乃は立ち上がるしかなかった。
「こっちだ」
今度は乳首を前へ引っ張られて、綾乃は足を前へ運んだ。鋭く重たい圧迫感だけでなく。脚を動かすたびに、縄の角が股間の奥の柔

らかな肉をえぐる。それに加えて、乳首をつねられる痛み。これに比べれば、乳房を握りつぶされる鈍い痛みなど物の数ではなかった。

庭先に引きずり出された綾乃の背に、高札が括りつけられた。縄褌に、これは百姓家から持ち出した麻縄よりすこし太い荒縄が継ぎ足されて、その中ほどを小島が握った。

「そら、歩け」

ピシリと、縄尻で綾乃の尻を叩いた。荒縄は麻縄よりも軽く、鞭打たれる痛みなど知れている。が、恥辱に変わりはない。

覚えず、綾乃は前へ歩んだ。

「あうっ……？」

縄の縁が柔肉に擦れて、チリチリッとした熱い感覚が股間に奔った。思わず腰を引いてしまう鋭い痛みだった。乳首への痛みが消えたぶん、股間への刺激が鮮明だった。綾乃は数歩進んだだけで、また立ち止まってしまった。

「お願いです。もう、腰を隠してくださいなどとは申しません。こ

の、この縄をほどいてください」
綾乃は、涙をこぼしながら小島に訴えた。いざ股間に縄を掛けられてみれば。女の急所を甚振られているのを他人に見られるのは、急所そのものを見られるより何層倍も羞ずかしいと思い知ったのだった。それに。恥辱にまみれながらでも歩くことはできるが、一歩ごとに股間を刺激されては、とても歩けるものではない。すくなくとも、そのときの綾乃はそう思った。
「小島さん。また、これを使いますか？」
藤川が、軒先の物干し竿から洗濯挟みを五つばかり取ってきた。またということは、この二人はこれまでにもこういった悪戯をしたことがあるのだ。
「ふむ」
小島は洗濯挟みは受け取らずに、綾乃の背後にまわった。
「こんな形（なり）で髪を結っているのもおかしかろう」

これまでの狼藉で簪は抜け落ち元結もほどけかけていたが、いちおうは高島田とわかる形を留めていた。それを、小島は無造作に崩した。バサリと、黒髪が裸の背中に広がった。数本を指に絡めて、ブチッと引き抜く。

「痛うっ……」

綾乃は小さく呻いたが、二度三度と繰り返されても、じっと耐えていた。

小島は四本ずつをひと束にして即席の糸を作り、その両端に洗濯挟みを結び付けた。さらに、四本ずつを結び合わせて長い糸にして、洗濯挟みをつないだ糸の中ほどに結んだ。

綾乃には、小島がなにを企んでいるのか、サッパリわからなかった。股間の圧迫に気を散らされながら、我が身を虐げている男の手元を見つめていたのだが。

「動くなよ」

クワッと口を開けた洗濯挟みを胸元に突きつけられては、厭でも

悟らざるを得なかった。
綾乃は、咄嗟に考えを巡らせた。逃げようとして、また大兵肥満の男に羽交い絞めにされるのと、みずからおとなしく嬲られるのと――どちらが惨めなのか。
綾乃はグッと胸を突き出して、みずから嬲られる道を選んだ。わざわざ胸を突き出したのは――小島の手元が狂えば、かえって痛い思いをするのではないかと判断したのと。これしきのことに怯えたりはしないという、武家娘の矜持だった。
「きひいいっ……」
乳首を洗濯挟みに噛みつかれて、矜持もか細い悲鳴を封じられなかった。
「くうう……」
もう一方も同じように噛まれて、さらに綾乃は呻いた。
しかし、仕置はこれで終わったのではなく、これから始まるのだった。

「では、参ろうか」
小島は長い糸の先を指に絡めると、先に立って歩き始めた。
「ひいいっ……」
洗濯挟みに噛まれた乳首を引っ張られる激痛に、綾乃はまた慎ましい悲鳴をこぼした。痛みをやわらげるには、小島を追うしかない。
「あうう……」
足を踏み出せば、股間の刺激が層倍する。けれど、乳首の激痛よりは耐えられた。
綾乃が庭先から道へ引き出されて。いつの間にか五十人ちかくに膨れ上がっていた人だかりが、サアッと二つに割れた。
小島が立ち止まって綾乃を振り返った。
「このまま引っ張られて歩くか。それとも、先に立って縄褌の艶姿を余すところなく衆目に晒すか。先に立って歩くなら、これは取ってやるぞ」
指で洗濯挟みを弾いて、綾乃からか細い悲鳴を引き出した。

綾乃は唇を噛んだ。この男は、わざと楽な道をふさぐような物言いをしている。けれど。乳首を引っ張られて歩くなんて、痛いだけでなくいっそうの恥辱でもある。

「おのれで歩きます。ですから、洗濯挟みは赦してください」

「ふん。最初から素直にしておれば、余分な痛い目は見ずにすんだものを」

小島は、あっさりと洗濯挟みを取り去った。

滞っていた血流が甦ってジインと乳首に痺れが湧き、不覚にも綾乃は、そこにかすかな快感を覚えてしまった。

「これで文句はないな。キリキリ歩け。歩みがのろければ洗濯挟みだぞ。つぎは勘弁してやらんからな」

「……」

綾乃は気力を奮い起こして小島を睨みつけ、おずおずと一歩を踏み出した。グリッと結び瘤が股間をえぐる。チリチリと縄の縁が柔肉をこする。そういった（控えめにいっても）不快感に耐えて、綾

乃は歩き続ける。

綾乃が近づくと、道を埋めている野次馬は左右に割れる。が、かろうじて人ひとりが通り抜けられるほどにしか動かない。通り過ぎる縄付の裸身を間近に覗き込んでから。一間ほどを置いて後に続く小島たちに身体が触れぬよう、大きく道を開けるのだった。

すぐに村を出て、やがて田圃も途切れ、延々と続くまばらな林の中を街道がほぼ一直線にどこまでも延びている。このあたりを開墾すれば一千石や二千石はすぐに増えるだろう。しかし、その開墾費用は藩にない。どころか、利子が乗って借入金が年々増えていく有様。農民も重い年貢に喘いで、今の農地を支えていくのがやっとだった。

半刻（※）も歩き続けるうちに、綾乃は次第に縄褌に慣れてきた。というよりも。最初に感じた鋭く重たい圧迫感の幾分かは、羞恥と驚愕とがもたらしたものだった。それはもちろん――未だ割られて

いない鉢に食い込む結び瘤のおぞましさは途方もないものだったし、足を運ぶたびに縄で擦られる柔肉への焼けつくような痛みはたしかにあるのだけれど。けっして、その場にへたり込むほどではなかった。乳首を洗濯挟みに噛まれて引っ張られる鋭い痛みに比べれば、我慢できなくもない。

そして綾乃には。我が身が大罪人の娘であるという負い目があった。

信じられないことではあるが、三千両を超える公金を盗んだのは父であると、御上が断じたのだ。もしかすると、父が拐帯したのは八百両だけで、あとの二千五百両は帳簿の間違いやら別人の仕業やらで、それまでが父にかぶせられたのかもしれない。けれど、父が罪を犯したという事実は残る。父に連座して家族が罰せられるのは当然なのだから――このように理不尽きわまりない扱いをされても、致し方のないことだと。そういう諦めの気持ちが、心根の底にあった。

しかし、綾乃の足取りは滞りがちだった。小島も、無理強いに綾乃を追い立てようとはしない。逐電した小早川を追うのではなく、向こうから姿を現わすのを待てばよいとでも考えているのだろう。

綾乃は行き会う者たちだけでなく、追い抜く者たちの目にも、恥辱の極致を晒す結果となった。さいわいに、敢えて一行に並び掛けるほどの物好きはいなかった。やはり、四人の侍と二人の供がかたまっているのだから、うかつな真似をして難癖をつけられるのは、誰しも御免こうむりたいところだ。

股縄の刺激にもすこしは馴染んで、縄目の恥辱にも裸身の羞恥にも幾分かは馴らされて――綾乃にも、あれこれとものを考えるゆとりが生じていた。

いったいに、父は大金をどのように使ったのだろうか。

十両盗めば首が飛ぶ。十両あれば、一家五人が一年間つましく暮らしてゆける。そんな中での二千五百両であり八百両だった。

父の性格からはかけ離れたことだが、酒色に耽って年に百両も使

えば、とっくに噂になっていただろう。それとも、昇進を目論んでの賄賂だろうか。ならば、賄賂を受けた側も同罪ではないのか。あるいは、大半の金はどこぞに隠しているのか。

そうこう考えるうちに。綾乃は小島の企みに大きな穴があるのではないかと思い至った。父がほんとうに救けに来てくれるとして、ノコノコとひとりで姿を現わすだろうか。百両もあれば、破落戸やら貧乏浪人やらを十人の上は雇える。如何に小島の腕が立とうとも、多勢に無勢だ。それとも、手向かえば娘の命は無いとでも脅すつもりなのか。

しかし、その考えを深く追い求めることはできなかった。

縄褌のせいだった。心に受けた衝撃が鎮まって、身体が縄褌に慣れていくにつれて。腰が妖しく疼き始めたのだった。それは――最前に肉襞をつつかれたときのような、落とし紙でうっかり肉蕾を擦ったときのような、一瞬の鋭い不可思議な感覚にも似ていた。それが性的な快感だとは、綾乃にはわからない。ただ、けっして不快で

はない。その感覚がひっきりなしに突き上げてくる。だけでなく。もっと鈍いが、ジインと腰全体が痺れるようなかすかな感覚もある。

この時代。厳格に育てられてきた武家娘には、性的な知識は皆無といってよい。男と女とがひとつ臥所でなにをするかは、嫁入り前に母親から危な絵紛いの図を見せられて、初めて知るのが普通だった。だから、この妖しい感覚が性的なものだとは、綾乃は知らない。けれど、女としての本能から、そこに禁忌のにおいを嗅ぎ取っていた。

綾乃は戸惑いうろたえながら、奇妙な感覚にとらわれていることを男たちに悟られまいとして、歩み続けた。首を扼されているので顔は上げているが、その目はなにも見ていない。うつむくかわりに前かがみになろうにも、高札の端が意地悪く縄褌に差し込まれているので、背を伸ばしていないと我が身でいっそう股間を圧迫して、妖しい感覚を募らせる結果になる。

そんな綾乃の姿は他人の目には――恥じらう風情もなく、縄で縛

りあげられた裸身を堂々と晒して歩いているようにも見えるのだった。

実のところ、綾乃も。今にも気を失いそうな羞恥に打ちのめされながらも、ただおのれひとりの考えに沈潜するだけではなく、周囲の様子に目を向け背後の男たちの声に耳を傾け始めてもいた。

行き交う人々が我が身に向ける眼差しは、侮蔑と好奇と、そして男のほとんどは、生娘にさえ明白に感じ取れる剥き出しの好色だった。旅人の中には家族連れや夫婦者もいる。その中の女たちは、最初のうち綾乃に同情と憐憫を禁じ得ないでもないようだった。しかし、それも高札を読むまで。小早川が着服した金高こそ記されていないものの、居所を報せた者に十両の賞金を与えるというのであるから、相当な額であろうとは知れる。十両盗めば首が飛ぶのであるから、その何十倍もの公金を私した大罪人は磔獄門でも足りないくらいだ。父親の罪は、そのまま娘の罪でもあるのだから——生かされているだけでも過分なくらいだ。

綾乃自身、そういうふうに考えている。しかも、自害すれば妹が身代わりにされる。罪人にふさわしく縄目の恥辱を受け、乙女にあるまじき素裸以上に羞ずかしい縄褌姿を晒して引き回されるのを甘受する以外、我が身に許された境遇はないのだ――と。

「小島さんは瓦器（かわらけ）にこだわるが、なんぞ訳がおありか」

背後で藤川の声が聞こえた。

綾乃は、まだそこまで知らないが。小島と藤川と。率先して綾乃を辱めているこの二人は、つるんで悪い遊びを繰り返してきたのだから、その嗜癖も熟知している。敢えて問うたのは、本多と平岩に聞かせるためだった。いや、いちばん聞かせたい相手は綾乃なのかもしれない。

「毛切れのおそれがないから存分に可愛がってやれる――と言えば、朴念仁も納得するだろうな」

「しかし、その実？」

「土手も裂け目も実核も丸見えになるのが、よろしい。女が身も世もなく羞じらう風情も、花を添える。有るべき物がないというのは、なかなかに風流だと思わぬか」
「ならば、いっそ頭も剃ってやっては如何」
「それは無粋だ。が、腋毛なぞは風流だな」
「このように縛っていては、剃ったところで眼福にはなりませんなあ」
「ふふん。そのうち吊り蔵きにでも掛けてやるか」
この身になおいっそうの辱めを加えられると聞いて、綾乃はおぞ気を振るうと同時に憤りをも覚えた。それくらいには、武家娘としての心根を取り戻していた。
しかし。いつ降りかかってくるやも知れぬ災厄よりも。綾乃はふたつの試練に直面していた。
ひとつは。歩を運ぶごとにジワジワとつのってくる、下半身の妖

しい疼き。食い込んでくる結び瘤が腰の奥をじいんと痺れさせ、柔肉に擦れる縄のチリチリする痛みが、そのまま鋭い違和感となり、割れ目の頂部に突出した肉蕾に小さな稲妻のような感覚が奔る。それはけっして不快ではないどころか、もっと大股にもっと早く歩いて、もっと疼きをつのらせたい衝動に囚われかけている。

それにしても――綾乃は、妖しい感覚から心を引き剥がそうと、別のことを考える。

差配人とみずから名乗った平岩は、どうして小島と藤川の狼藉を看過ごすのか。遠慮がちに咎めはしても、差配人として配下を抑えようとはしない。

着物を切り裂いた腕の冴えから推し量って、まことの討手は小島なのだろう。しかし、この男は部屋住みの身。それは藤川も本多も同様だと、三人の身なりやこれまでの話の断片から綾乃は見当をつけている。御家としての討手なのだから、家臣でなくてはならない。そこで平岩が抜擢されたのか貧乏くじを引かされたのか。

ふいに腰縄を引かれて、綾乃は後ろに転びかけた。
「もちっとゆっくり歩け。いくら気持ちが良かろうと、先走りはいかんぞ」
カアアッと、綾乃の顔に血がのぼった。股間の疼きに突き動かされて、いつか足早に（そして大股にも）なっていたのだった。
「しかし、この娘。いきなり股縄の味を覚えるとは、見かけによらず淫蕩ですな」
「淫蕩でない女など、いるものか。しかしたしかに――今夜が愉しみではあるな」
ギクリと、綾乃の心が凍りついた。今夜のうちにも操を穢されると、小島の言葉を正しく理解したのだ。とはいえ。具体的になにをどのようにされるのか、それがわからない。男が小便の用に使う肉棒を女の割れ目に突き立てるという知識すら、綾乃にはなかった。
けれど、考えてみれば。嫁げば夫から夜毎にされる営みでもある。裸身を縛されて衆目に晒されるよりは羞ずかしくもなくつらくもな

かろうと――せめて、そう思いたかった。
「一番槍は俺、二番槍が藤川でよろしいな」
とは、ほかの二人も引きずり込もうという小島の悪巧み。
「そのようなこと、拙者が許さぬ」
平岩がいささか気色ばんだが、小島に一蹴される。
「この娘の扱いについては、俺に任されている。たとえ差配の指図といえども、聞く耳持たぬわ」
「では、それがしは搦め手を責めるといたそう」
処女を奪った直後に後門まで突き抜こうというのだから、本多も残虐さにおいて小島や藤川に負けていない。
綾乃には、ことに本多の言葉がサッパリわからない。ただ、すくなくとも三人に操を穢されるとだけはわかる。女が生涯に操を捧げる相手は夫ただひとり。それがいきなり三人とは――卒倒しかけた綾乃だったが。女郎として夜毎に別の男に嬲られる妹の境遇に思いを馳せると、我が身を悲しんでばかりもいられない。

それに。いまひとつの試練がいよいよ切迫してきた。
「お願いの儀がございます」
綾乃は足を止めて男たちを振り返った。
「ほんのしばし、縄をほどいていただけないでしょうか」
「隙を突いて逃げようとしても無駄だ」
小島が、わざと見当違いを答える。
「そうではありませぬ。あの、ですから……あそこに見える茂みで、つまり、その……」
「この娘、用を足したがっているのではありませんか？」
平岩が助け舟を出したが、はたしてどちらの助けになることやら。
「用とは、何用かな？」
「つまり、その……」
平岩も、ズバリとは言いにくくて言葉が淀む。
「糞小便のたぐいを催したのではないか」
本多が茶番劇に加わった。

「ほう、糞小便か。そうなのか？」
すっとぼけて、綾乃に尋ねる小島。
「は、はい……」
綾乃は顔を赤くしながらうなずいた。
「罪人は垂れ流しと決まっておる。唐丸籠がいい例だ」
「……！」
綾乃は、絶句するしかなかった。
「小島殿。それは、いささか酷に過ぎます」
「糞小便の都度に縄をほどいていては切りがない。それに、我らに見られながら道端にしゃがんで糞をひり出すほど、この娘が破廉恥だとは思えぬがな」
「それは……」
片手だけを縛って長い腰縄を付けるとか、やり様はいくらでもある。そんなことは承知の上で、若い娘に生き恥を重ねさせようとしているのだと――平岩もさすがに小島のねじくれた淫欲の一端に気

づいて、言葉を失った。
「しかし、糞小便を垂れ流して、跡始末もできずに歩き詰めるのも、可哀想であるな」
ホッとしかけた綾乃だったが。
「日が暮れて休む前にはほどいてやる。それまで我慢するか、こらえ性もなく垂れ流すかは、おまえ次第だ」
とても無理だと、綾乃は絶望した。厠を使ったのは、朝に一回きり。いくら飲まず食わずできたとはいえ、すでに三刻は経っている。羞恥に苛まれながら千々に乱れる思いに翻弄されて、気がつけば、よほど下腹部を引き締めていないと漏らしそうにまでなっていた。しかも、尿意をこらえようとすればするほど、縄褌の刺激を意識してしまう。このまま夕方まで我慢できるはずもない。
「立ち話をしているうちに、見物も増えてきたな」
二十人ばかりが立ち止まって、男六人と女ひとりを遠巻きにしていた。旅人だけでなく、近在の百姓衆やら荷運びの馬曳きやら、果

ては飛脚まで交じっている。
「宿に着いてまともに糞小便をしたいのなら、トットと歩け」
小島が、ことさらに大声でうながした。
綾乃が悔しさと悲しさとに顔をゆがめながら、無言で踵を返した。
股間への刺激に妖しい感覚をつのらせながら、一方で拷問にも等しい尿意と戦いながら、綾乃は足早に歩き続けた。物見遊山の旅人はもちろん、所用で先を急ぐらしい商人や侍までも追い抜いて――まだ陽のあるうちに宿場町に着いた。
緊縛された裸身で一行の先頭をあるく娘のまわりに、ワッと人だかりができる。高札の文言を読んで、ならば遠慮は無用と、十人のうち九人、つまり男衆はじっくりと見物を続ける。
役人もすっ飛んできたが、通行手形に加えて上意書まで見せられては。
「大変なお役目、ご苦労に存じまする。あまり騒ぎを大きくせぬよ

う、なにとぞ御配慮を賜りたい」
役人としての戸惑いと男としての好色とを綯い交ぜにして、振り返り振り返り引き返して行った。
「まだ陽は高い。追捕の役目があれば、ここでノンビリするわけにもいくまい。つぎの宿場まで足を伸ばそう。よろしいな、平岩殿」
一刻（※）も早く解き放たれたいばかりに先を急いで、かえって裏目に出たと、綾乃は後悔した。つぎの宿場がどれだけ先にあるかは知らない。が、日が暮れるまで歩きとおしても辿り着けるとは思えない。まさか野宿するつもりか、どこかの百姓家に一夜の宿を借りるつもりか。
「では、出発だ」
この一刻ほどはその必要もなく、小島も手控えていたのだが。ピシリと、腰縄で綾乃の尻を叩いた。

「あっ……」
まだ尿意に苦しまねばならぬという落胆と、不意打ちの衝撃とで。
「あああ、ああっ……」
綾乃は、ついに失禁してしまった。
放尿の快感は、無い。尿はたちまちに縄褌に堰き止められ体内にあふれて、そこに在るとは知らない腰の奥の壺へと逆流するかたわら、結び瘤の隙間からもチョロチョロと流れ出る。
「ううう、ううう……」
内腿を伝わる生暖かい感触とともに、綾乃は泣き崩れた。
「立ち止まるな。トットと歩け」
ピシリ。小島が腰縄の端で尻を叩いたが、綾乃は立ちすくんだまま。荒縄の一本や二本では効き目が無いとばかりに、柄袋を払って大刀を抜き、峰を返して横殴りに叩いた。
ビシイッ！　尻肉がひしゃげて、真一文字に赤い筋が刻まれた。
「ぎひいっ……」

前へよろめいたところを、さらに峰打ちが追いかける。
ビシッ、ビシイッ！
きっちり同じ間隔で三本の筋が刻まれた肌に、さらにバッテン（×）が付け加えられた。
綾乃は泣きじゃくりながら、前へ前へと追い立てられていく。
「小島殿。武士の魂をそのようなことに用いるのは、不謹慎です」
「左様か。ならば、適当な得物を見繕っていただこうか」
「む……」
小島の求めに応じれば、おのれも狼藉に加担することとなる。
「そう四角四面にならずともよかろうではないか」
本多も小島の肩を持つ。
「刀は所詮人切り包丁。塀を乗り越えるときの足掛かりにもなれば、竹藪を掻き分ける役にも立つ。女の尻を打ち据えるのも、また一興というもの」
この男もまた、綾乃ほどにも武士としての矜恃など持ち合わせて

いないようだった。
本多にまで引導を渡されて、孤立無援の綾乃がみずから進んで歩み始めたときには、尻は真っ赤に腫れあがり、無数の線条で埋め尽くされていた。

※刻（トキ、コク）
時間単位の刻は二通りあります。
日の出から日の入り（夜は逆）までを六等分したもの（約二時間）は、トキと読みます。昼夜、夏冬で長さが変わります。
暦学者などは定時法を用いて、一日を百刻として扱いました。
一刻は十四分二十四秒となり、これはコクと読みます。
「一刻（いっこく）を争う」という表現は古くから使われているので、コクも広く知られていたと考えられます。いくら昔の人間がのんびりしていたにせよ、急いでいるときに一時間がどうでも良いは

ずがありません。
ただし本作品においては、従来の時代小説の慣例に従い、約二時間のトキのみを使うことにしました。